

学齢期前半までのメディア接触における 保護者の役割に関する e ラーニングサイトの開発

堀田博史^{*1} 堀田龍也^{*2}石塚丈晴^{*3} 高橋 純^{*4}

＜概要＞学齢期前半までの子どものメディア接触について、ステレオタイプに伝わっている保護者の考え方を変えるために、保護者の役割について学ぶ e ラーニングサイトを開発した。各単元の学習後に、考え方の変化を自己評価した値を分析した結果、幼稚園と小学校低学年の保護者間の平均値に有意な差は見られないものの、特定の単元で考え方の変化量に有意な差が見られた。

＜キーワード＞家庭教育、e-ラーニング、学習環境、システム開発、幼児教育

1. はじめに

子どもが関係する社会的事件が、メディア接触と関連づけられることも少なくない。特に学齢期前半までの子どものメディアを取り巻く環境には、教育現場よりも、家庭環境が大きく関係しており、保護者の役割が重要となる。しかし、学齢期前半までの子どものメディア接触に関する保護者の役割について、学ぶための書籍や e-ラーニングサイトはほとんどない^[1]。

今こそ、幼児期から小学校低学年までの学齢期前半の子ども達の保護者を対象に、インターネット技術を用いた双方向のコミュニケーションが可能な環境を実現して、教育現場のメディア利用の実態や家庭におけるメディア接触のあり方、保護者の役割を、実践経験がある専門家から系統的に学ぶ機会が必要である。

2. 目的

本研究の目的は、学齢期前半までの子どものメディア接触について、ステレオタイプに伝わっている保護者への考え方を変えるために、保護者の役割について学ぶ e ラーニングサイトを開発することである。

3. 方法

(1)保護者が、学齢期前半までの子どものメディア接触について学べる e-ラーニングサイトを開発する。

(2)e-ラーニングサイトの評価は、学習後に保護者が子どものメディア接触に対する自らの考え方が、どの程度変化したかを自己評価した値で分析する。

4. e-ラーニングサイトの設計

e-ラーニングサイトで、保護者にどのような知識理解を促すかを検討した結果から、知識体系や教材群の系統性について、すでに以下のようにまとめた^[2]。

4.1. 知識体系

- a. メディアを利用する時の効果と留意点
- b. 教育現場でのメディア利用の実態
- c. メディア制作者の開発コンセプト
- d. 家庭での子どものメディアとのつきあい方

4.2. 教材群の系統性

知識理解の体系をより具体化するために、調査、開発、実践、理論に区分して、メディア利用に関して経験豊富な実践者や開発者をインタビュー取材して、教材群の系統性を考え、以下の7つの学びの単元を設定した。

単元1:メディアに対して親はこんなふうに思っている！

単元2:教育現場でメディアをどう利用しているの？

単元3:メディアはこんなに効果がある！

単元4:メディアは(健康に)よくないのでは・・・

単元5:番組やソフトはどんなコンセプトで開発されるの？

単元6:メディアとのつきあい方はどうするの？

単元7:まとめ 対談:学齢期前半までのマルチメディア接触について

*1 Hiroshi, HOTTA : 園田学園女子大学 e-mail=hotta@sonoda-u.ac.jp

*2 Tatsuya, HORITA : メディア教育開発センター

*3 Takeharu, ISHIZUKA : 静岡大学 *4 Jun, TAKAHASHI : 富山大学

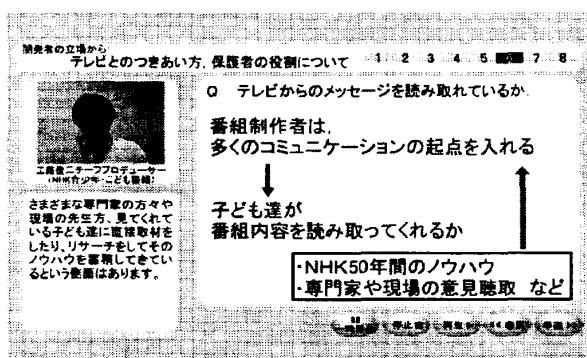


図1 教材画面のイメージ

5. e-ラーニングサイトの開発

上述したような設計原理のもとに、e-ラーニングサイトを開発した。教材はすべて動画像を中心に、インタビューした内容をスライドにして、動画像と動機をとっている。また、巻戻しや早送り機能の他に、セグメント単位で動画像を再生することを可能にした。1つの教材で映像が流れる時間は、低速なネットワークを配慮して2分以内とした(図1)。

クライアント側に推奨する環境は、CPU: Pentium III 750MHz 以上、メモリ: 128MB 以上、OS は Windows XP、ブラウザは Internet Explorer 6 以上で、インターネット接続は 128kbps 超が望まれ、Macromedia Flash Player Ver.8 が必要である。

サーバ側のシステムは1台のコンピュータに、独自開発の LMS (Learning Management System) と Web サーバ、データベースサーバの役割を持たせている。

6. e-ラーニングサイトの評価

6.1. 調査方法

期間: 2006年5月下旬～7月下旬

対象: 幼稚園児または小学校低学年の子どもを持つ保護者各18名

手段: 各単元の学習後に、自らの考え方の変化を「大きく考え方に变化をもたらし」などの4件法で回答

6.2. 学習後の保護者の考え方の変化

表1に、学習後の考え方の変化量を示す。2

が基準値であり、単元2・6・7の平均値が特に高くなっており、保護者の子どものメディア接触に対する考え方に变化があったことを示している。

(1) 幼稚園及び小学校の保護者間の平均値の差

等分散性の検定及び対応のないt検定の結果、幼稚園と小学校低学年の保護者の学びの効果を表わす学習後の考えに変化を起こした値の平均値には、統計的な有意差はなかった。

(2) 考え方の変化量での単元間の平均値の差

単元毎の考え方の変化量は、一元配置の分散分析の結果、学びの効果を表わす自らの考えに変化を起こした値の平均値に有意な差 ($F(6,245)=7.62, P<.01$) があった。さらに単元毎の対応サンプルの検定を行った結果、単元1及び単元4と他の単元とで、5%水準で有意な差が見られた。このことから、単元2・3・6・7は、単元1・4に比べ、保護者の考え方に变化を及ぼしたと言える。

7. 結論

学齢期前半までの子どものメディア接触について、保護者の役割を学ぶe-ラーニングサイトを開発、運用した。その結果、他人の意見や健康面の配慮などを学ぶ単元よりも、教育現場でのメディア利用の実態やメディアとのつきあい方などの単元で、保護者の考え方の変化が大きいことがあった。

謝辞 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金「学齢期前半までのメディア接触における保護者の役割に関するe-ラーニングサイトの構築」(基盤研究(C)(1): 課題番号 17500666)の援助を受けた。ここに感謝の意を記す。

【参考文献】

- [1] (株)ベネッセ次世代育成研究所 親と子のメディア研究会(2006)
<http://www.benesse-jisedaiken.co.jp/media/>
- [2] 堀田博史・堀田龍也・石塚丈晴・高橋純 (2006) 学齢期前半までのメディア接触における保護者の役割に関するe-ラーニングサイトの設計、日本教育工学会研究報告集 JSET06-3: pp103-110

表1 学習後の保護者の考え方の変化

小の保護者 ()は幼 n=18	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6	単元7
平均値	2.11(2.17)	2.89(3.00)	2.67(2.83)	2.44(2.44)	2.61(2.89)	2.72(3.00)	2.83(2.89)
標準偏差	0.471(0.618)	0.676(0.594)	0.594(0.707)	0.705(0.616)	0.502(0.676)	0.575(0.767)	0.514(0.676)